

令和6年度 理科実践・研究計画

部 員 ○柴田 省吾、井上 駿太、佐藤 咲紀

研究テーマ

様々な自然の事物・現象に対する疑問を科学的な手法を用いて問題解決し、理科と日常生活のつながりを意識する子どもを育む学び

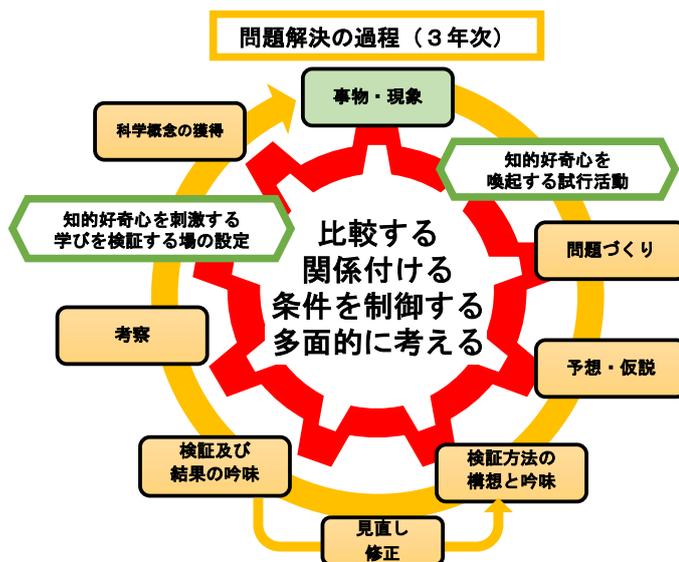
1 研究テーマについて

2年次は、理科と日常生活とのつながりを考えられるような場面や機会を設けた。その上で、子どもたちが自ら進んで理科と日常生活を関連付けて考えていく姿をより多く引き出すことが今後の課題となる。

そこで、前年度に引き続き、「様々な自然の事物・現象に対する疑問を科学的な手法を用いて問題解決し、理科と日常生活のつながりを意識する子どもを育む学び」の研究テーマの下、今年度は知的好奇心を引き出すという視点で実践を積み重ねていく。

まず、問題を見いだすことができるように、事物・現象や日常生活と関連のある共通の体験を得る活動（試行活動）を設ける。この試行活動を設定することにより、はじめは活動ができるという「注意を引く」程度の知的好奇心が子どもの中に生じる。そして、個々が感じた疑問や気付きを集約していく中で、友達の間での一致や不一致について「探究してみたい」という知的好奇心が喚起されると期待できる。また、生活経験の乏しい子どもも予想や見通しをもつことが比較的簡単になり、日常生活から学習問題へと学びの価値を見いだすことにもつながる。

問題解決の過程の中で、学びを検証する場面を設ける。そうすることで、「あの現象は他の事物にも当てはまるのか」「学習では、こういう結論になったけれど、生活の中にある物は本当にそうなっているのか」というように知的好奇心が刺激されると期待できる。その知的好奇心が、本校の目指す自律した学習者へとつながっていくのではないかと考える。自分なりの疑問を探究する機会をもつことにより、理科での学びと日常生活とのつながりについての解釈が深まり、自ら進んで理科と日常生活を関連付けて考えていく姿がより多く引き出されると仮説を立て、実践を積み重ねていく。



図：理科 自律した学習者を育てる学習のプロセス

理科で目指す自律した子どもの姿

- ・様々な自然の事物・現象に自ら疑問を見だし、その疑問を探究しようとする姿
- ・学んだことを試す活動を通して、自然の事物・現象と日常生活のつながりを意識していく姿

2 研究の重点〈○は具体的な取組の例〉

理科と日常生活のつながりを意識し、「学びのものさし」を働かせる学びのデザイン

- 導入の場面で、取り扱う事物・現象に対する共通の体験を得、学習問題設定につなげることができるような試行活動を行う。
 - ・雨の日以外に出て水たまりができやすいところを観察したり、じょうろを用いて実際に水を流したりする活動（4年 雨水のゆくえと地面のようす）
- 問題解決の過程で学んだことを試す場面を設ける。
 - ・電気を通す物をもう一度家の中で選択・決定しながら、調べることができるような環境整備（3年 電気の通り道）